

小

っていますね、やはり馒头マンコですね。」張総は経験豊富なため、快感の吟叫声を抑えきれませんでした。陰茎が半分以上挿入されるにつれて、抵抗が徐々に増し、何かに当たったように感じるようになりました。小蔓は酔い覚めていましたが、体の自然反応はまだあり、張総が深く入るにつれて、淫乱な喘ぎ声を出すようになりました。張総は陰茎が半分以上挿入されると底を突いたと思い始めましたが、止めませんでした。他人の妻を手玉に取ることができ、心配する必要はありません。DNA 鑑定業界が年々発展していくのを見たことがありますか？数多くの人妻が壊れたり大きくなったりしています。

本当に体が太っている張総は力を加えて下に挿入し、太いチンポは外側に3〜4センチしか残っておらず、前に膣内に封じ込められていた精液は一度に噴出してしまいました。小蔓はこの強烈な一撃で快感と痛みの両方を感じて悲鳴を上げました。「ああ〜旦那さんやめて〜もうやめて〜」目が覚めたばかりの小蔓が必死に叫びました。張総は小蔓が目を覚ましたことに気づき、言葉をかけずにゆっくりと引き抜き、再び挿入し始めました。まだ完全には覚醒していなかった小蔓は、大きなチンポに刺激されて絶え間なく浪費をしていました。数十回ゆっくりと抽出された後、美しい目を開け、目が覚めました。最初は夫だと思っていたが、目を開けると自分は曲がった身体で、膣口が向いていて、身体の上には張総がいて、一生懸命に突かれていた。チンポの出入りにつれ、白い粘液が絶えず圧迫されている。「ああ〜張総〜なぜあなたが〜あなたはなぜ〜ああ〜やめて〜やめて〜ああ〜」「どうしたの、小蔓、私があなただけをやるように頼んだじゃないか？」張総はリズムを乱すことなく、一度に一回ずつ押し込んでいきます。「私なんか言っていないわ〜あっ〜あっ〜」小蔓は手で押し返そうと必死になっても、体重差には全く太刀打ちできませんでした。「こんなに淫らに着飾って、開きっ放しのパンティーを履いて、誰かにやられるためでしょ？」挿入が進むにつれ、小蔓の膣は徐々に慣れてきました。張総はより滑らかな動きに気づき、出入りのスピードを速め始めました。

口の中でも人妻をからかい続けます。「まだ言ってる、なんでそんなに水が出るの？」「うん〜うん〜ああ〜私じゃない、ああ〜旦那さんに買ってもらった〜」「あなたの旦那さんは本当に幸せ者ですね、小蔓は本当に美しくて、本当にきつくて、水がたくさん出ています。」「ああ〜やめて〜張総〜もうやめて〜ああ〜」「男性の精液を着て、どこにでも行ってるじゃないですか。そんなに小さいの？私にも遊ばせてください。」「ない〜ああ〜私はない〜」張総がどんどんスピードを上げると、小蔓はもう話すことができなくなりました。「私はない〜私の旦那さんの〜ああ〜」「あなたの旦那さんの何ですか？ちゃんと聞こえませんでした。」張総は意図的に軽く引き抜き、再び重く挿入し、パチパチという音を立てました。小蔓はこのように操られることで実際に十分に楽しんでいましたが、まだ強い口調を保っていました。「私の旦那さんの精液です〜」「あ？」張総は疑問を投げかけた、「本当にすみません、私のチンポであなただけの旦那さんの精液を全て搾り出してしまいました。」「うう〜うう〜うん〜うん〜」小蔓は泣き声のような喘ぎ声を上げました。「それがあなたの旦那さんの精液なら、小蔓さんは浪費することはできません。」と言って、

流れ出る精液を指で集め、小蔓の膣口に伸ばしました。「小王さんから聞いたところ、あなたと旦那さんは妊娠の準備をしているんですよね？ 本当に申し訳ありません、あなたの旦那さんの精液を出してしまいました。」小蔓が答えるのを待たず、彼女が叫び声を上げた時に、精液まみれの指を口の中に入れました。小蔓は混乱してしまい、ただ指を含んで操られるしかありませんでした。張総は小蔓が口と舌で手指をきれいにするのを待って、抜いて言いました。「早く食べて、あなたの夫はあなたに射精するのに苦労したんだから。」小蔓は泣きそうに口を開け、屈辱的に飲み込みました。「そうだよ～あなたはあなたの夫の精液を嫌うと思った。もっときれいに食べ続けましょう。」張総はまた精液を拭き取って彼女に与えるふりをする、小蔓は必死に「張総～ああ～お願い～やめないで～ああ～」と言いました。「やめないで？ それじゃあいいよ～小蔓、結婚してもこんなに淫乱だったとは思わなかった。」張総は聞いて、ますます力を入れ始めました。「そうじゃない～ああ～と言ってるのは～ああ～やめて～やめて～」小蔓は眉をひそめ、歯を食いしばっていました。「もうダメだ～張総～止めて～痛いよ～あなたのは大きすぎる～」「ほう？ あなたの夫より大きいですか？」張総はタイミング良く速度を落とし、最初に挿入された時のようにゆっくりと動き始めました。「うん～うん～大きすぎる～深すぎる～」小蔓は珍しく息をつきながら、手で張総を押して言いました。「張総～もう止めて～私には旦那さんがいるから～ああ～私たちはこうしてはいけない～ああ～」「ごめんね、小蔓、あなたは本当に魅力的だから、我慢できなくて、あなたを見ると好きになっちゃうんだ。それに、あなたはこんなに着飾ってるから、私はあなたが同意したと思ったんだよ。」「張総～ああ～動かさないで～止めて～」張総は聞く耳を持たず、ゆっくりと抽出を続けました。「ああ～ああ～この服～うん～私の夫からのプレゼントだよ。」「じゃあ、なぜあなたはあなたの夫の精液を着て出てきたの？こんなに気持ちいいですか？」「私～私～うん～そうじゃないの～うん～私は彼と一緒に～～妊娠準備をしているんだ。」「ほう？まずは快適かどうか教えてください？」

小蔓は恥ずかしそうに頭を横に向け、蚊のような声で「うん」と答えました。「小蔓、あなたがセックスする姿は本当に美しいですね。あなたの夫もあなたを愛しているんでしょう？」抽出は遅くても、張総の巨大な器官はここにあり、それぞれの動きは小蔓に前代未聞の刺激と充足感をもたらしました。「うん～張総～私～本当に旦那さんに申し訳ないです～ああ～やめてください～」「ごめんね、小蔓、前に入れたときにあなたの夫の精液を全部出しちゃったから、許してくれる？」この言葉はあまりにも恥ずかしく、小蔓はどう答えていいかわかりません。張総は何度か激しく挿入し、小蔓を淫らにさせ、問いました。「答えないと、私を許さないの？」「ああ～ああ～うん～許す～許す～早く止めて～」小蔓は浪費しながら答えました。「だめ、ちゃんとした言葉で話して、何を許すの？」張総はこの時意図的に速度を落とし、小蔓は彼女をからかうために故意に行動することを知っていましたが、答えなければならぬと思っていました。話さないと、彼女は彼に激しく扱われることになるでしょう。「私があなただけを許します～旦那さんの精液を出してくれて～」小蔓は顔を手で覆いながら言いました。「張総～お願い～抜いてください～」張総は普段とは異なり、言うことを聞いて止まり、少し考え込んで言いました。「抜いてもいいけど、問題があります。あなたが約束する必要があります。」チン

ポはまだ挿入された状態を保っていますが、動きがないため、小蔓は以前ほど刺激を受けず、言葉をはっきりと伝えることができました。「何ですか？」張総はため息をついて言いました。「前にあなたの中に旦那さんの精液があることを知りませんでした。」自分の夫について言及されたことに耳を傾け、小蔓は顔を赤らめました。張総は美しさを鑑賞するために続けました。「あなたの夫の精液を偶然出してしまったけど、私のちんぽも汚れたよね。」

小蔓はますます赤くなり、陰道がチンポで突かれていることを気にせず、不安そうに身体を動かし、自分自身を刺激して感じました。「小蔓、これは私が他人の精液を初めてチンポに付けたことです。私のチンポをきれいに舐めてくれますか？」「ああ？」小蔓は天真に目を見開きました。「あなたが口で私のチンポをきれいに舐めることです。それら全てはあなたの夫のものです。あなたは気にしないでしょう。」小蔓は愕然として、このような要求があるとは思わなかった。張総はこれに気づいて再び挿入し始めました。小蔓は急いで彼の大きな腹部に手を当て、「ああ～やめてください～私が約束しますから～止めて～」と言いました。張総は再び止まり、小蔓の髪を整えながら言いました。「小蔓、あなたは本当に美しいです。私にはもう1つお願いがあります。キスを交わしてくれませんか？」「ああ？」小蔓は再び愕然としました。張総は軽く笑いながら言いました。「あなたが寝ている間に、私たちはすでにキスをしています。ただ、もう少し深いキスをしたいただけです。大丈夫ですか？」そして彼はまた腰を数回軽く振り、拒否しない限りは続けるつもりの方でした。小蔓は考えてみると、キスも交わし、挿入もされ、それなりに経験があることに気づき、うなずいて承諾しました。張総はとても幸せそうに言いました。「小蔓、あなたは私が見た中でもっとも美しい妻です。本当にあなたの夫を羨ましいと思います。」

「嫌だ～張総～先に抜いてくれ。」張総はふざけた笑みを浮かべ、再び数回速く挿入し、小蔓を喘がせました。「正直に言って、私に操られて気持ちよかったですか？」張総がそんなに凶々しい態度をとるのを見て、小蔓も何も言えず、恥ずかしそうに答えました。「気持ちよかったです～張総、もういいですか。」張総はまた聞きました。「あなたの夫と比べて、誰がより気持ちよく操られたと思いますか？」小蔓は聞いたことで恥ずかしくなり、それでも彼女を突いていることを考えると、答えるしかありませんでした。「張総の方が気持ちよかったです～ああ～」張総は動きを止め、小蔓の顔を整えて、自分を見つめさせました。「来て、私を見て、完全に答えてください。私とあなたの夫、誰があなたをより気持ちよく操ったのですか？」小蔓は恥ずかしがりながらも、彼女の下半身に張総のチンポが挿入されていることを知って、頭を抱えて大きな目で張総を見ました。答えなければまた遊ばれることを知っていたが、この言葉は実際に恥ずかしいため、口に出すのは難しかった。

張総は小蔓の頭を押さえ、ゆっくりと腰を動かし始めました。チンポが小蔓の陰道内で混乱したような刺激を与えます。小蔓は興奮して、頼みに近い声で言いました。「うん～うん～あなたが私より気持ちよく操っている。」「だめだ。」張総はしつこく言いました。「声が小さすぎて、不完全です。誰が誰よりも気持ちよく操られたかを言ってください。」その後、動きを加速させました。「ああ～やめて～やめて～」「早く言え！言わなければ操り殺すぞ！私はあなたのピッチの中に射精したい！」小蔓はついに屈服し、彼女の夫よりも張総が所持

ちよかったと答えました。「良い子～来て～私たちは体位を変えましょう。キスをしてあげますからね。」張総は横になり、小蔓を抱きしめ、男性が寝ているベッドスタイルに変えました。女性が上になるスタイルで、全行程でチンポは小蔓の体の中に挿入され続け、プロセスは非常に熟練しています。先程の打撃スタイルは長時間遊ばれていたため、小蔓の足は少し麻りました。その時、小蔓は息を吐きながら張総の体に俯いていました。両足を開いて、大きなチンポが彼女の陰道に挿入されているのがはっきりと見えます。精液が横に流れ、白い泡が打ち抜かれています。小蔓が落ち着いたことを見て、張総は小蔓を抱きしめ、優しく彼女の唇を軽くキスしました。小蔓も軽く返答し、やがて張総は舌で小蔓の歯をかき分け、舌を絡め合わせました。小蔓は目を閉じて、徐々に熱狂的に反応し始めました。一方、張総はゆっくりとチンポを引き抜き、再度挿入し、動きは恋人のように柔らかかったです。小蔓は抵抗することはありませんでした。一方で、彼女は張総とキスしながら、チンポの刺激を楽しんでいました。長いキスの後、小蔓は手で体を支え上げ、張総は小蔓の乳房を愛撫し、つかみ、揉みながら激しく抽送し続けました。小蔓は浪叫び続け、張総は老練なプレイヤーだったため、小蔓が絶頂に達することを知って、さらに激しく操作し続けました。「ああ～～～」小蔓は高い声で叫びます。全身が張総の上に崩れ落ちました。張総は小蔓の髪を撫でながら、小蔓の陰道から感じる締め付けを楽しみました。何秒も持続しました。

「気持ち良かったでしょう、小蔓。」小蔓は息を切らしながら答えました。「張総、あなたは本当に悪い人です。私を許してくれると約束したのに。」「ふふ、小蔓、いや、覃太太、あなたがあまりにも美しすぎるせいです。」小蔓はすぐにまた顔を赤らめ、とても可愛い様子でした。「張総、あなたは本当に嫌いだよ。あなたのせいで夫に申し訳なくなりました。でも、私たちは本当に続けることができます。」「覃太太、あなたは絶頂後、さらに美しくなりましたよ。こっちに来てキスしてください。」小蔓は仕方なく優雅に唇を差し出しました。張総は人妻の口唇を舌で遊ばせながら、彼女をそっと抽送し始めました。「ああ～ああ～」小蔓は張総に乳首をつままれ、喘ぎ声を上げました。しかし、大きなチンポで既に一度絶頂を迎えていたため、彼女の耐性は多少高くなっていました。百回以上挿入された後、彼女は抜け出し、体を起こして張総に言いました。「張総、もう続けることはできないの。私は夫を本当に愛しています。彼は私にとっても優しくしてくれます。そして～そして～私は妊娠の準備をしているんです。もうあなたとは続けられません。」「小蔓、この一回だけで終わりにしましょう。今晚はよく過ごしましょう。思い出に残すことにしましょう？」小蔓は両手を張総の胸に添え、自分で身を起こしました。しかし、彼女はすでに腿を広げていたため、下半身が張総とつながっており、以前の騎乗位のような姿勢や、ブラウスタイルのような姿勢も、張総の大きなお腹に阻まれて、彼女の柔らかい秘所に張総の大きなチンポを完全に挿入することができませんでした。今、彼女が自分で身を起こしたため、体重のため、彼女は完全に大きなチンポを自分の小さなマンコに喉元まで飲み込んでしまいました。そして、長時間の性交により足が弱くなり、立ち上がる力がありません。彼女はただ直立して、17cmの大きなチンポが彼女の体内に完全に突き刺さった感覚を楽しみました。小蔓は直接張総の腰に座り、あ～あ～と喘ぎ声を出していました。彼女はチンポを抜こうとするたびに、張総に腰を押さえられてしまいました。場面

は、小蔓が自分で体を動かしている女性上位のように見え、彼女が起き上がるたびにチンポが半分抜けて、再び深く挿入される光景が続きました。実際に、小蔓の細いウエストが、そんなに太く長いチンポを受け入れることができるのは驚くべきことです。張総も非常に満足しており、小蔓の本来タイトな秘所は、今や彼を完全に包み込むことができ、しかも女性側が主導権を握っていることに感心し、「気持ちいいよ～小蔓、あなたは私が全部挿入することができた初めての女性だよ。」とため息をつきました。

小蔓は腰とお尻をくねらせ続け、比類なき充実感に浸っていました。張総の言葉を聞いて、彼女は手で顔を覆い、チンポに座って動かなくなりました。彼女は自分が半ば強制的で半ば自発的にイカされたことを思い出し、そして、自分が恥知らずに騎乗位で鳴いていたことを思い出し、もっと欲しくなって止まらなくなっていたことを思い出しました。小蔓が突然顔を覆って黙り込むのを見て、張総は慰めました。「小蔓、人は幸福を追求する権利がある。あなたが好きで、私も好きだから、それでいいんです。そんなに考えないでください。そして、今夜はあなたと私だけのものです。他の誰にも知られることはありません。」小蔓が反応しないのを見て、張総はゆっくりと下半身を動かし始め、不規則な動きで上下左右に動かしました。やはり、その動きで小蔓は再び浪叫し始めました。

### 03. 受精編

張総は、わずかな手法で小蔓が自分で腰をくねらせ、尻を上げて合わせ始めたのを見て、動きをやめ、両手を後頭部に当て、小蔓の演技を楽しんだ。小蔓は目を閉じて、快感に浸っていましたが、今本当に自分が夫以外の男性のチンポに自ら乗っていることに気付いていませんでした。場面では、赤いセクシーなランジェリーを着た可憐な人妻が、大きなお腹の肥満男性のチンポにまたがり、自分で動いていました。彼女は軽く起き上がれば、体内からチンポを抜くことができます。しかし、美しい人妻はこの時、目を閉じ、口を少しあけて、浪叫していました。「すごく大きい～あ～すごく深い～あ～」張総は淫らに笑いました。「小蔓、あなたはこんなに美しいんだよ。」小蔓は、「うぐぐ～うぐぐ～ん～ん」と含糊不明な声を出し、返事をするのかどうかわかりませんでした。最初は尻を上げて自分の淫穴にチンポを挿入させました。その後、全体重をチンポに乗せ、大きなチンポを自分の膣内に全部入れられるようにし、前後に腰をくねらせ続けました。このような動きは、大きなチンポによる充実感を楽し